

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 宗教文化の授業を考える研究会

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001781">https://doi.org/10.57529/00001781</a>

## 宗教文化の授業を考える研究会

### 研究会の趣旨・目的

「宗教文化の授業研究会」の趣意書を次に引用する。

近年大学における授業の質の向上は、喫緊の課題として各大学で取り組みが進められている。しかしマルチメディア教材やインターネットの利用方法、メディアリテラシーの向上といった他の授業科目とも共通する課題のほかに、学問領域ごとに固有の課題もあるだろう。宗教文化の授業についていえば、宗教教団の实地踏査の方法や、調査方法、教室で「信仰」を扱うことから起こる問題などが挙げられるだろう。こうした問題への対応は、これまで基本的には教員個人の能力、資質に委ねられてきた。

今後「宗教文化士」資格の導入も視野に入れて考えると、個人の資質に頼るのではなく大学における宗教文化関連授業全体の質を上げていく取り組みが必要になるだろう。とくに経験の浅い若手教員にとっては、直面する問題の解決や情報交換のための場が必要であると考えられる。

そこで、科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表：星野英紀)プロジェクトの教材開発の一環として、「宗教文化の授業研究会」を立ち上げ、具体的な授業実践の方法や、情報を持ち寄り、分析、研究を進める。そしてその成果を広く公開し、大学における宗教文化関連授業の充実に資することとした。

この研究会は、岩井洋(帝塚山大学教授)、弓山達也(大正大学教授)、平藤喜久子(國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所准教授)、黒崎浩行(國學院大學神道文化学部准教授)の4名が世話人となって発足した。

研究会は原稿執筆時点で3回を数えており、研究会が運営するメーリングリストには30名が登録している。2009年度に行われた第1回、第2回の研究会について、その概要をお伝えする。会場はいずれも國學院大學学術メディアセンター5階06会議室である。

### 第1回研究会(2009年12月26日)

初回は、研究会発足の必要性と取り組むべき内容について、世話人から問題提起し、参加者から自由に意見を出しあうブレインストーミング形式で進めた。

平藤氏は、留学生と日本人がともに履修する科目で、現代の日本の宗教をめぐる状況について基本的な知識を得て、社会と宗教との関わりについて考えることを目的とする授業の事例を挙げ、学生からの質問や議論を紹介しつつ、そのような疑問に答えていくにあたり他の研究者に意見を聞きたい点を挙げた。たとえば、問題のある宗教団体を授業でとりあげるさいの距離のとり方、宗教施設に学生を引率するさいの適切な選択、などである。また、特定の事象をとりあげたさいに教室で「笑い」が起こったときの対処や、生命倫理やジェンダーといった多様な価値観をめぐる議論をどのように取り扱うか、といった疑問

も加えられた。

岩井氏は、この研究会で取り組むべきことを「コンテンツ」と「メソッド」に分けて提示した。コンテンツに関しては、前提として大学生の宗教文化に関する基礎的な知識・教養の現状を把握しておくことが重要であるとし、高校の世界史、日本史、倫理の教科書の内容をおさえることを挙げた。実際、民俗宗教に関する語彙（「山伏」など）が意外に大学生に知られていない、という。また、初年次教育のコンテンツの一つとして「カルト問題」を取り上げた。メソッドに関しては、この十年来、FD 活動によるレベルアップが日本の大学教育全般において取り組まれてきたが、そこに宗教特有の問題があるかどうかをさぐる必要があると指摘した。

櫻井義秀氏（北海道大学大学院教授）は、実際に授業で用いているプレゼンテーション資料を紹介しつつ、カルト問題に関して初年次教育のなかで全学的に共有可能な事柄を挙げた。ただし、カルト問題への取り組みは大学によって異なるため、この研究会で取り組むべきは知識の共有であって、対策ガイドライン作成のようなことではないだろうと指摘した。

黒崎は、グループディスカッション形式の授業方法を簡単に紹介しつつ、教室内の相互行為のみでは疑似的、「箱庭」的なものにとどまる点と、担当科目が宗派教育的な目標を掲げているのでそれなりに機能しているが、そうではなくあらゆる価値観に距離を置くところに目標を設定した場合にうまくいくかどうか、という点を指摘した。

参加者からもさまざまな問題が提起された。たとえば、双方向的な授業について、宗教について好き嫌いがある学生はかえって参加しやすいが、宗教に無関心な学生をどう授業参加へと促すか。教職課程科目では「信教の自由」を教える必要があり、そのための授業実践にも注目したい。多様な価値観がある

ことを学ぶさいの教員の立場と対立主義・世俗主義。授業における宗教調査の方法とマナー。学生からの宗教にまつわる相談への対処法。シラバス、教科書、視聴覚教材などの共有は、若手教員にとってありがたい。等々。

議論をふまえて、今後研究会で取り組むべき課題が4つ浮かび上がった。(1)カルト問題に関して、宗教文化の授業としてどこまで踏み込むことが妥当か。(2)学生参加型の授業の工夫とそれにとまなう宗教文化教育固有の問題。(3)宗教調査をとり入れた授業の展開方法と問題点。(4)価値観や実存的な問いを授業でどう扱うか。そのほか、「宗教学」等の科目でなくとも、宗教文化に関わる文学や映画などをとりあげた授業での取り組みについても、研究会参加者のネットワークを広げていきながら知見を共有したい旨が確認された。

## 第2回研究会（2010年2月28日）

第2回研究会は、「カルト問題をどう教えるか」というテーマのもと、櫻井義秀氏、弓山達也氏、近藤光博氏（日本女子大学准教授）が、それぞれ授業実践例を紹介しながら発題し、議論を行った。

櫻井氏と弓山氏はカルト問題や「カルト」とされる教団の調査研究を行ってきた専門家だが、カルト問題の専門家ではない研究者・教員が、授業でどこまで踏み込んで説明し、学生の疑問に答えていけばいいのかをさぐることを今回の目標とした。発題内容についてはテーマの性格上非公開とされた。議論では、カルトの勧誘方法や予防策を説明するだけでなく、宗教と社会との多様なつながりを取り上げることや、あえてジャーナリズムを素材にしてカルトに関するメディア・リテラシーを構築するといった新たな視点・方法が提示された。

## むすび

2010年度に入ってから第3回「宗教の授業と調査法」(2010年7月4日)を開催し、第4回「調査映像を授業にどう使うか」(2010年9月12日)も開催予定である。また、6月5日に立命館大学で開催された「宗教と社会」学会学術大会総会で、本研究会が「宗教文化の授業研究」プロジェクトとして承認された。以上の詳細は稿を改めたい。

大学全入時代の到来と単位の国際的な通用性向上のために教育の質保証が求められ、そ

のため各大学でFD活動が組織的になされてきたが、それとは別に、若手研究者・教員の授業運営をめぐる悩み・葛藤の吐露やそれに対する有益な示唆は、研究テーマを近しくするコミュニティのなかでインフォーマルになされてきたように思う。この研究会では、「宗教文化士」資格の立ち上げを機に、後者のような場を目に見える形にして参加者をオープンに募り、宗教文化教育に固有の問題を認識しつつ乗り越えていくことをめざしている。一層の研究者・教員の参加を望みたい。

(黒崎浩行)